

## 呼び名の政治学

長かった本連載の最後に、私が1979年以来現地調査を続けて来た西南ケニアのキプシギスの人々の名付けを、改めて何回か取り上げた。人々が「名前を生きている」具体的な状況に踏み込んでおきたかったからだ。そして、それが可能なのは、私が実際に参与観察した人々に限られる。

私の連載は毎回400字×8枚弱という分量であり、扱える事とそうでない事がある。例えば、数多くの祖霊名の継承について具体的な資料を示して、人々が語る理念と現実を事細かに比較して読み解く事は、残念ながら不可能だ。それには、4-5世代にわたる系図を基にした概念図を掲げた上で、丹念な分析を試みなければならないだろう。

しかし、可能な事のほとんどは既に取り上げたとする。今回、たった1つのテーマに触れて、いよいよ私の連載の幕引きとしたい。

## ■挨拶の政治学

二人の人物が出会う場面には、「親和／反発」をめぐる緊張とドラマが孕まれていて、それは挨拶（の有無）によって媒介される。

伝統的に年齢組織を政治構造の核として統合されて来た、キプシギスの無頭的（acephalous）な社会。そこで繰り広げられる老人支配（gerontocracy）では、挨拶（*kat*）と握手（*kat-ge*）が、個人間だけでなく世代間の関係においても、老人支配のための文化装置となっている。近隣の他民族や世界中の大概の社会とは異なり、キプシギスでは、最初に手を差し出したり挨拶の言葉を掛ける（事が出来る）のは、より古い年齢組員など、目上の者の方なのである。

手が触れ合う小さな官能ともいえるべき身体感覚は、自他の差異を一旦解除して無化する。その上で、目上の者が“*Cham-gel*”、即ち「（本来期待されている）自分（のあり方）を愛せ

よ！」と声を掛け、相手のあり方を規定し直すのだ。さらに、老人は、握手と全く同じ身振りで相手を呪う事ができるのである〔小馬徹『挨拶と握手行動の身体論と政治学』、菅原和孝・野村雅一（編）『コミュニケーションとしての身体』、1996〕。

今日では、相対する2人の間の上下関係は、単純に年齢組の古さでは決まらない。植民地化以後に導入された様々な職業や社会的な地位についているか、またそのどれについているかが重要だ。さらに、急速な教育部門の拡充と共に学歴のもつ比重が増している。それゆえ、複雑な要素をいかに調整しながら、自他の上下関係をどう見切るか、出会いには一つの「命懸けの跳躍」があるといえるのだ。特に、初めてや、久しぶりの出会いの場合がそうである。

## ■呼びかけの政治学

この「命懸けの跳躍」は、具体的には、相手をその複数の名前の内のどれで呼ぶかで表現される事になる。

私の友人のPeter Kipkirui arap Lang'at (38歳)を例に出そう。一般的に言えば、彼への呼びかけは、丁寧な方から順に、①arap Lang'at（尊称付きの父称）、②Peter（「クリスチャン名」）、③Lang'at（尊称抜き父称）、④Kipkirui（幼名）となる。無論、実際には、彼に呼びかけるのが誰かによって事情が異なる。例えば、彼の妻の母親は、④は勿論、①も③も使えず、②を用いるしかない。

1999年8月の或る日、Peterが私の小屋で作業を手伝ってくれている所へ、Joseph arap Koros (34歳)という人物が彼を訪ねてきた。Josephは年下だが、Peterと同じKorongoro年齢組員であり、隣人でもある。JosephがLang'atと呼びかけると、Peterは、にこやかにKorosと彼を呼び返して応じ、手を差し出した。

そこへ、Collins Kibet arap Rotich (22歳、前回・前々回参照)が私を訪ねて来た。彼はPeterに気づくと、Kipkiruiと呼びかけて、手を差し伸べた。Peterは一瞬躊躇したように見えたが、握手に応じてCollinsと呼びかけ返した。

私には、驚きだった。JosephはPeterの同年齢組員だが、年下なので彼を幼名でKipkiruiと呼ぶなど思いもよらなかった。同年齢組員でも幼名で呼びかけられるのは、同じ年にイニシエーションを受けた者 (*botum*) であるだけでなく、隔離小屋を共にした者 (*bagulei*) でもある者だけである。それ以外には、両親と兄、年の大きくかけ離れた姉、同じ村の両親以上の年長者に限られる。

Josephの立場では、PeterにはPeterと呼びかけるのが一層適切なのだが、2人は隣人で、気軽に冗談を言い合う仲だから、打ち解けてLang'atと呼ぶのである。だが、CollinsがPeterをKipkiruiと呼ぶのはわけが違う。だから、私には全く予想外の事態だったのである。

## ■命懸けの跳躍

Peterも、恐らく内心愉快ではなかっただろう。でもPeterが節度を失わずに、CollinsをCollinsと丁寧に呼んだ一つの要因は、私がある場に居合わせた事だったろう。しかし、それだけではない。Peterは、彼なりに2人の関係を多面的に整理して、納得していたのだと思う。

事情はこうである。Peterは、1987年に高校をそこそこの成績で終了した後、ンダナイ中学校の教員になった。この就職には、父親が植民地時代にアフリカ人法廷の判事を務めた実力者だった事が、与って力があっただろう。ところが、その後ケニア全体の教育施設の充実が進んだのに伴い、ケニア教員雇用委員会 (Kenya Teachers Service Commission) は、1995年3月に大量の大学卒業者を雇用した。その結果、Peterは解雇され、大工店を開いた。当時、父親は死の床についており、2カ月後に世を去ったのである。

一方、Collinsは1998年に第2の国立総合大学であるモイ大学を優秀な成績で卒業した。だが、折から政府は極度の財政難に苦しんでおり、教

育省はこの年から2、3年の予定で新任教員の採用を停止した。彼の才能を惜しんだンダナイ中学校の父兄たちは、彼を父兄雇いの教員にした。また、彼の父親は、長年務めたChepellewo 亜郡の行政副首長を定年 (55歳) で止めたばかりだが、社会的な影響力をまだ残している……。

私の小屋での思いがけない遭遇は、2人にとって、相手をどう呼んで関係を規定するかの、いわば「命懸けの跳躍」の場となったのだ。

## ■連載のおわりに

さて、いよいよ幕を引かなければならない。アフリカについても、書き漏らした事もあるれば、語るべき事もまだ残っている。例えば、アパルトヘイト政策が放棄された後、南アフリカ共和国では、希望、自由、感謝、民主主義などを意味する名前がたくさんの赤ん坊に付けられた。幸せを祈念する名付けは、概してアフリカの伝統に反する。だからこそ、南アの人々の隠しようのない喜びが伝わってくる。その喜びが名付けにも新たな時代を開こうとしているのだ。

脈絡を抜ければ、語るべき事はもっと多い。悪魔ちゃん事件も再論してみたい。悪名は、親の切なる祈りの逆説的な表現でもある。周囲の非難に耐えて、わが子をイツハク・ラビンと名付けたパレスチナ人の夫婦がいる。晩年のM.トウェインにはサタンという名前の美少年を主人公とする『不思議な少年』という作品がある。生命倫理学ならどう整理するだろう……。

6年半、足掛け8年の連載は楽しくもあり、辛くもあった。ともかくも書き続けて来た。「歩み続けると、男の人は自分の名前を忘れることがあります」(藤原新也) —ふう—ん。「いっしょうけんめい／あそんでいと／じぶんのなまえ／わすれてしまいそうや」(藤井剛史、小学2年) —！

読者の皆さん、編集部皆さんの、長い間、本当に有り難う。名前を忘れる事はなかったけれど、名前であっさり遊びました。暫くは名前を忘れてしまいそうな程。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)